

認知症で終末期、望む治療は

点滴47% 胃ろう6%

自分が認知症になり末期状態になった場合、水分を補給する点滴を望むのは47%、胃に穴をあけて栄養を入れる胃ろうを望むのは6%。こんな結果が、厚生労働省による国民の意識調査でわかった。終末期の医療でも、治療の中身によって望む割合は異なる実態が浮き彫りになった。

27日にあった厚労省の検討会で、速報値が報告された。今年3月、無作為抽出した20歳以上の男女5千人に郵送で調査表を送り、44%の2179人から回答があった。がんや認知症、心臓病といった病ごとに受けたい治療や、最期を過ごしたい場所を聞いた。

認知症になって終末期を過ごしたい場所は、特別養護老人ホームや老人保健施設といった施設が最も多かった。一方、末期がんで、

自力で食事や呼吸ができないが判断力は以前と同じ場合、点滴を望む61%、胃ろう8%と認知症の場合より

も高かった。過ごしたい場所は、身の回りのことが自分でできるためか、自宅を希望する割合が高かった。自分で判断できなくなつた時に備え、どんな治療を受けたいかを書面に残して

おくことには70%が賛成するものの、作っている人は3%、最期の治療について家族と詳しく話し合っている人も3%と少なかった。座長の町野朔・上智大教授(刑法)は「終末期のあり方は様々。家族の間で十分に話し合うことが大切です」と話す。(辻外記子)